

# 経済学のルーツはオイコノミア OIKONOMIA。

だからキリスト教ローマ帝国の「救済の摂理」が気にかかる



## 近代文明と一橋大学

一橋大学は、建学（1875年）以来、ヨーロッパの学問に範をとって学科を編成してきました。西欧の技術やノウハウを導入することは、近代日本を形成する上で重要な課題にはかかなりませんでした。が、他方で、ヨーロッパ社会の基層文化を理解することなしには、それらが、われわれ日本人、アジア人にとって、真に役立つ学問となるはずもありませんでした。経済史という学問分野は、まさにこの近代経済社会の形成過程を分析しながら、彼我の社会論、文化論を考えています。

例えば、西欧やアメリカのマネジメント論の根底には、個人主義的人間観があります。ところが、日本人やアジア人には、マネジメントの対象として個々の人間を見る姿勢とは別の、固有の人間関係が伏在しているようにも見えます。朋輩や仲間という意識。契約ではなく、互酬の原理で結びあう人間関係。そういった人間存在のあり方が、社会の編成原理にどう反映しているのか。これは、社会を観察する上での重要な観点といえるでしょう。

## 現代文明の源流にさかのぼる

一橋大学の文明史の伝統は、視野の広さと分析の深さまで比類のないものです。本学の黄金期を支えた三浦新七先生（1877-1947）は、輸入し得べきヨーロッパの学問、技術、制度の根底にある価値観や個性を、それとして捉えようとされました。そして、その歴史的個性を把握するために、非ヨーロッパ地域の個性的把握に努められた。その比較文明論の中でこそ、特殊ヨーロッパ的な舞台装置を歴史形成論的に掴まえることができる、というわけです。世界標準化した近代西欧の制度や価値観を、人類史の展望の中で洞察する。比較文明論という壮大なプランの中で、暗黙知を含めた日本人の常識を客観的な言葉で確認しながら、世界標準

化した価値を取り入れようとしているのです。

私の研究の核にあるのは、今のイスタンブールを中心として存在したビザンツ帝国です。アメリカ社会を中心とした現代世界の一元的な世界観や行動の淵源は、このビザンツ帝国にある、と考えるからです。キリスト教化したローマ帝国の遺産が、西ヨーロッパやロシアを経由して、現代世界をかたち作っている。まさに現代文明の源流を訪ね歩いている、と考えています。

## 文明論が必要なわけ

いろいろな価値観をもった人びとが同じフィールドにいるというのが、今日的現象でしょう。ヒト、モノ、カネ、情報が行き交う世界、多様なベクトルの合流地点としての時空間、があるのです。価値共存の世界にいるわれわれとしては、そのような世界でどうコミュニケーションを構築するかは、大きな課題でしょう。それには、ディシプリンベースのツールだけでは不十分です。ツールを扱う人間への深い共感と、共通知としての文化、文明への理解が必要だと思います。ツールばかりでなく、そのバックグラウンドも一緒に理解しよう、という姿勢が求められるといえるでしょう。

## オイコノミアとは「救済の摂理」

経済学にはいろいろな切り口があります。理論経済学や、数学を駆使して定量分析する分野と並んで、経済社会の構造原理を解明する定性分析も大切です。

エコノミクスの語源を知っていますか。オイコノミア (Oikonomia) というギリシア語です。これは、オイコス (Oikos = 家) とノモス (Nomos = 法律、摂理) が結び付いてできました。古代ギリシアでは、家父長が統べるイエ経済を意味しましたが、2～3世紀、テルトゥリアヌスによって新しい用語となりました。この言葉が、

巡りめぐって「経済学」となるのです。

18世紀に至るまで、オイコス・ノモスは、多様な分野を含んだ前近代的な「家政」を指していたようです。そこには、動植物についての知識から、農業、林業、気象学、天文学までが含まれていました。テリトリアヌスたちキリスト教徒によれば、それはいわば「世界」を統御する神の摂理にもとづく事象であって、「神の家」(宇宙)の摂理ということになるのです。キリスト教世界的なこの用語を、私は「救済の摂理」と訳しました。

貧困問題や所得再分配論、資源問題など、今日的な問題群も、古来「救済の摂理」に属する主題だった。近代国家の福祉制度も、前近代世界における慈善活動も、同根なのです。哲学的テーマであると同時に、すぐれて現実的課題が、そこにあるのです。

## 中世ローマ帝国との出会い

私が取り組んだテーマは、ギリシア的規範にローマ帝国とキリスト教の理念が結び付いてビザンツ世界で形成された、以上のような原理にもとづく制度の分析でした。

大家族的な家父長制にあっては、「貧困」はイエ経済のうちに解消されています。家父長が一族郎党の面倒をみている世界を想像したらよいでしょう。キリスト教化の進展に伴って、〈個〉の意識が浸透し、各〈個〉が「世界」に放出される、という大転換が「古代末期」(4～6世紀)に進行します。神と向き合う〈個〉の叢生です。この世界では、共同体的互酬関係よりも、自律的個人の哲学が優先する。つまり、個人の資質と努力に応じて、世俗的栄達への可能性が開かれるとともに、共同体の保護から解放された分だけ、物質的(=経済的)貧困の脅威にさらされる危険性も出てきたのです。

その事態を、キリスト教徒の皇帝が「救済」する、という仕組みができあがった。教会が果たす貧民救済の機能に対応し、これに免税措置を与えて、国家=教会の機能的連携ができあがったのです。この仕組みこそが、ヨーロッパの基層文化の根底にあるのです。

このような研究に取り組む契機となったのは、大学に入る前に、一橋の先生方が書かれておられた書物と出会ったことでした。

増田二郎先生の『大学でいかに学ぶか』(講談社現代新書)は、自身の研究テーマを立てることの重要性を平易に説かれて、実に魅力的でした。また、渡辺金一先生の『中世ローマ帝国—世界史を見直す—』(岩波新書)は、まったく歯が立ちませんでした。中世に屹立する世界帝国の魅力を縦横に語られて、私にとっては決定的な出会いとなりました。入学後は、ドイツ中世史の山田欣吾、阿部謹也の両先生からも指導をいただき、大学での勉強の意味を教えてくださいました。パウロではないですが、まさに、目から鱗が落ちる、思いでした。

## 私は近代人か? と問うこと

私がいつも授業の最初で問うのは、「われわれは近代人か?」ということです。

私は、かつて時間割と一緒に揃えようとして、クラスメートに「この科目を取ろうよ」と提案したら、「Mind your own business」と言われたことがあります。「ほっといてくれ」というわけですね。彼には、目指す目標があって、有機的で無駄のない時間割を考えていた。これこそ欧米流の個人主義ですね。その時の私はそうではなかった。もちろん、共同体的で互恵的な人間関係は重要です。それは、よくいえばチームプレイであり、日本の徳目ですらある。しかし、当時の同級生がそうであったように、どうも欧米社会は違っている。

## 歴史と世界を見直す眼

繰り返し言えば、私がビザンツやヨーロッパの中世社会を研究するのは、古代末期に淵源をもつ価値観や世界観、人間観が、歴史の現実として世界標準化したわけを知りたいからです。はるか昔の地中海世界で生成された理念や制度が、今日の礎を提供した。そう考えると、EUに継承されているヨーロッパ・地中海世界の地域的個性が、無類に面白く感じられてくるのです。

20世紀の経済史学は、近代国民国家史観に立っている。その国際競争史としての英独仏比較史論、各国民国家における社会階層(階級)論が、議論の中心にありました。21世紀の今こそ、この学問史の批判的検証をすべきときなのかもしれません。19世紀以来の学問と大学という制度の変遷の中で、ネガティブな価値評価とともに隠蔽されてきたものが数多くあるのでは、と思う昨今です。

社会思想の水田洋先生(名古屋大学名誉教授)や、経済学の伊東光晴先生(京都大学名誉教授)といった泰斗からお話しを伺う機会があります。本学の卒業生でもある碩学から、「近代人」なる人間類型の生誕と、本学が果たした役割、その歴史的位相について考えるキッカケをいただけるのは、誠に有難いことです。学べば学ぶほど、一橋大学は、昔も今も、実に宏壮で奥深い知の殿堂なのだな、と痛感する毎日です。(談)



経済学研究科教授

大月康弘

Yasuhiro Ohtsuki

1985年一橋大学経済学部卒業後、同大学院経済学研究科入学、1990年同研究科博士後期課程単位修得退学、一橋大学経済学部助手、1991年成城大学経済学部専任講師、1994年助教授、1996年一橋大学経済学部助教授、2006年一橋大学大学院経済学研究科教授。その間に、バリ第一大学客員研究員等。著書に『帝国と慈善 ビザンツ』(創文社)(第49回日経経済図書文化賞受賞)など。